

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19510265
 研究課題名（和文） 沖縄周辺都市における社会変動と宗教的意識の変容に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of Social Change and the Transformation of Religious Consciousness in Ishigaki, Okinawa
 研究代表者 森田 真也（MORITA SHINYA）
 筑紫女学園大学・文学部・准教授
 研究者番号：10412686

研究成果の概要：本研究は、沖縄周辺都市である石垣市を中心に取り上げ、その歴史性を含んだ社会変動と宗教的意識について考察したものである。具体的には、主として「豊年祭」という同地最大の祭祀の構造と変容について、さらには祭祀担当者である「ツカサ」という女性司祭者の現代的展開について着目し、八重山諸島の宗教的世界の特徴について分析した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：民俗学、文化人類学、沖縄地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：祭祀、司祭者、シャーマニズム、沖縄、周辺都市、社会変動

1. 研究開始当初の背景

沖縄の宗教的な領域は、これまで多くの研究者の関心を集めてきた。戦前、柳田国男、折口信夫、伊波普猷といった民俗学の先学によってはじまる研究は、沖縄の宗教的な領域の特殊性を認めつつも、日本本土との連続性を強調し、沖縄の姿に日本の古代の宗教性をみるものであった。その後、1960年代以降、主に文化（社会）人類学者によって進められた研究は、各地域の詳細な現地調査に基づくもので、主として祭祀と女性司祭者を、その地域の社会構造や親族組織との関わりにおいてとらえるものであった。また、民間の宗教

的職能者の研究は、主にシャーマニズム研究の文脈で行なわれた。

民俗学の沖縄研究は、地域偏差を無視し、沖縄本島周辺の事例を中心に沖縄全体を一枚岩としてとらえてきた傾向が強い。一方、文化（社会）人類学の沖縄研究は、個別の地域性を重視したため、詳細なデータの蓄積を生んだ反面、全体的な理論化の立ち遅れを招いた。また、宗教的な領域に関する豊かな事例は、そこに影響を与えてきたであろう歴史性、政治・経済的变化といった、沖縄の大きな社会変動を無視することにつながった。

本研究では、以上のような反省と研究の蓄

積に立ち、これまで比較的研究が手薄であった、日本最西端の地方都市、石垣市（石垣島）を中心とした八重山諸島を取り上げる。石垣市は台湾（中華民国）と接する、いわば国境の周辺都市にあたる。いわゆる伝統的な村落ではなく、「四箇（登野城、大川、石垣、新川）」と呼ばれる市街地は、歴史的に八重山諸島の政治・経済的中心地である。また、現代的生活スタイルの浸透は、他の日本の地方都市と同様である。そして、本研究では具体的テーマとして、祭祀と女性司祭者の現状と動態に着目し、同地の社会構造上の特質や歴史的経緯、政治・経済的変化とともに分析していく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、沖縄における社会変動と宗教的意識の動態について、民俗学的視点から解明することである。

沖縄の信仰は、日本本土のそれとは異なる面を多く持つ。特に村落の祭祀を中心となって執り行なうのは、「ノロ（祝女）」や「ツカサ（司）」といわれる女性司祭者である。これらの女性司祭者が村落の祭祀の中核を担うという形式は、近代以前の琉球王国の時代からのものであり、現在も継続している。

これまで多くの蓄積を持つ沖縄の祭祀や女性司祭者の研究は、歴史的背景、政治・経済的変化の影響と宗教的領域を分断し、祭祀の理念的な形態をとらえていくような極めて静態的なものが多かった。また、沖縄本島周辺の父系原理を基軸にとらえてモデル化していく研究が主であった。しかしながら、八重山諸島は、統治形態が異なり、沖縄本島と同様の親族集団は存在せず、系譜意識も異なっている。さらにいうと、これまで奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島において、シャーマニズムの文脈から「ユタ」と呼ばれる民間の宗教的職能者の研究が進められてきた。しかしなが

ら、八重山諸島において、シャーマニズムが希薄であることが知られていても、女性司祭者との関係、社会的意味については、研究の進展がなかった。

そこで本研究では、主たる調査地として周辺都市である石垣市を設定し、祭祀の特質、ツカサと呼ばれる女性司祭者の役割、継承、世界観等について、シャーマニズムとの関係をふまえながら検証していく。そして、祭祀と女性司祭者の在り方をおして、沖縄の人々の宗教的意識の変容の考察を行なう。

以上のように、本研究は、民俗学のみならず、文化（社会）人類学の研究も含めた観点からの研究を進めていく。そして、八重山諸島を基点に、沖縄全体の祭祀と女性司祭者の現代的展開をとらえる。また、祭祀や女性司祭者の研究のみならず、シャーマニズム研究の流れも意識しながら、沖縄の人々の宗教的意識の動態、さらには宗教的特質を導き出し、その理論化を目指すものである。

なお本研究は、特定の地域研究であるとともに、将来的に沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島の祭祀と女性司祭者の地域間比較研究を目指したものである。また、沖縄全体の宗教と社会の関係の解明を目指す基礎的研究にもあたる。

3. 研究の方法

本研究では、祭祀と女性司祭者に着目し、人々の宗教的意識についてみていく。そのため主な調査地として選定した石垣市街地、竹富島（竹富町）他においてフィールドワークを行なった。以下のようなスケジュールでインタビュー調査、祭祀の参与観察、あわせ文献他の資料収集を行ない、分析を試みた。

初年度は、石垣市を中心とした基礎的調査に力点をおいた。具体的には、石垣市街地の四箇（登野城、大川、石垣、新川）のそれぞれの「ウタキ（御嶽）」という聖地を統括し、

祭祀を執行する女性司祭者のツカサへインタビューを行ない、その役割・機能、継承と輩出原理、就任過程、司祭者同士の関性等について調査を進めた。また、同地において最も中心的祭祀である「豊年祭」他の調査を行なった。あわせて石垣市の周辺地方都市としての性格、歴史的展開、地域社会の全体像を把握するために、政治・経済的变化と生業の関わりなどについて調査研究を進めた。

二年目は、継続して石垣市において、インタビュー調査、二度目の豊年祭の調査を行なった。また、竹富島において、ツカサへのインタビュー、「種子取祭」の調査を行なった。そして初年度の調査結果とあわせて、周辺地方都市としての石垣市の性格を把握し、八重山諸島の地域的な特徴、さらにはこれまでの研究の蓄積を踏まえて沖縄諸島、宮古諸島との比較検討を行なった。

調査日程

2007 年度

第 1 回調査、7 月 26～31 日（石垣市、竹富町[竹富島]、那覇市）。豊年祭の参与観察。

第 2 回調査、8 月 22～31 日（石垣市、竹富町[竹富島、波照間島]、那覇市）。盆、アングマー、ムシャーマの参与観察。

第 3 回調査、2 月 23～27 日（石垣市、竹富町[竹富島]、那覇市）。

第 4 回調査、3 月 8～10 日（那覇市）。

2008 年度

第 1 回調査、7 月 21～25 日（石垣市、竹富町[竹富島]）。豊年祭の参与観察。

第 2 回調査、10 月 13～20 日（石垣市、竹富町[竹富島]）。種子取祭の参与観察。

第 3 回調査、2 月 20～26 日（石垣市、竹富町[竹富島]、那覇市）。

4. 研究成果

(1) はじめに

本研究では、前述したように沖縄における社会変動と宗教的意識について考察していく。そのため、まず主たる調査地である石垣市四箇の社会的・宗教的な概要について述べる。そして、同地最大の祭祀である豊年祭の構造と変容についてみていく。さらには祭祀の中心となる女性司祭者であるツカサの現代的展開について取り上げ、八重山諸島の宗教的世界の特徴について考えていく。

(2) 石垣市四箇の社会的・宗教的概要

石垣市は八重山諸島の政治・経済の中心地であり、日本最西端の地方都市である。また、石垣空港、竹富町の各離島、与那国町、宮古島市、那覇市を船で結ぶ港があり、海上交通の要所でもある。石垣島最南部の四箇、もしくは四箇村と呼ばれる、登野城（トゥヌスク）、大川（フーガー）、石垣（イシャナギイ）、新川（アラカー）の 4 字は近世から多くの人が集まる地域である。

歴史的にみると 1500 年の「オヤケ・アカハチの乱」の平定を以って琉球王府の支配を受ける。1543 年以降、「蔵元」という琉球王府の官衙・政庁が置かれ、直接的な統治がなされた。17 世紀、石垣、登野城両村が創立され、18 世紀中頃、新川は石垣から、大川は登野城から分村しており、それぞれが現在も兄弟村という意識を持っている。他の離島と四箇の大きな違いは、琉球王府の命を受けた士族層（役人）と在来の農民層（平民）の明確な区別があることがあげられる。居住地も糸満からの寄留民である漁を生業とする人々の住む地域、士族層の住む地域、農民の住む農作地を中心とした「マフタ」と呼ぶ地域が分かれていた。近代に入ると、各種官庁、金融機関が置かれ、会社等の事業所、寄留商人

の商店が増加した。この時期、既に八重山諸島の人口の約4割が四箇に集中している（その後、5～6割の推移があるが現在約8割の人口が集まる）。1926年に石垣町制が施行され、1947年に市に昇格している。

2000年現在で、石垣市の人口総数は44771人、17127世帯である。うち登野城は9495人、大川は3710人、石垣は3827人、新川は8706人となる。登野城は東北、新川は南西方面へ拡大化しており、埋め立てもあって人口の増加がみられる。特に近年、郊外への大型店の出店、マンションやアパート建設等、他の地方都市同様にスプロール化が進行しつつある。さらには、観光開発、島外移住者の増加により地価の高騰が社会問題化しつつある。

八重山諸島では、聖地である御嶽は各村の一つではなく複数あり、「オン」と呼ぶ場合が多い。御嶽には祭祀を担当する女性司祭者であるツカサがいる。主たる御嶽として、登野城には天川御嶽（アーマーオン）、美崎御嶽（ミシャギオン）（現在は大川の管轄）、大川には大石垣御嶽（ウシャギオン）、石垣には宮鳥御嶽（メートウルオン）、新川には真乙姥御嶽（マイツバーオン）、長崎御嶽（ナースクオン）がある。各御嶽には「ヤマニンジュ」という、日本本土でいう氏子組織のような帰属集団がある。この場合、登野城の住民は天川御嶽、大川の住民は大石垣御嶽、石垣の住民は宮鳥御嶽、新川の住民は真乙姥御嶽と長崎御嶽のヤマニンジュとなる。なお、美崎御嶽はヤマニンジュのいない御嶽である。「クギオン（公儀御嶽）」という別称、「ウラヌピナカン（蔵元の火の神）」があるように、琉球王府と直接つながる御嶽であった。

(3) 祭祀の構造と変容

石垣市四箇においては、各字の御嶽ごとに、ツカサを中心にして年間通して祭祀が行な

われているが、なかでも最大の行事が豊年祭である。目的は豊作への感謝と前年の祈願を解くこと、来年の豊穰の予祝の祈願である。毎年、旧暦6月の壬・癸の2日間に行なわれるため、通常は新暦の7月下旬の開催となる（2007年は7月27～28日、2008年は7月22～23日）。現在では、1日目を「オンプール」、2日目を「ムラプール」と呼んでいる。

1日目、登野城では、まず午前中に稲為御嶽（イヤナスオン）でツカサを中心にした祈願、「ブバナアギ（穂花上げ）」という稲の初穂があげられる。「ミシャグパーシ（神酒囃子）」といい、男性たちによって神酒を注いで神謡がうたわれる。そして、太鼓と巻き踊りの奉納となる。その後、午後、旗頭他が天川御嶽に移動して、同様の祈願と奉納、農業に関する表彰、棒技、獅子舞等の奉納芸能となる。大川の大石垣御嶽でも、祈願と奉納はほぼ同様であるが、午後、旗頭はいったん美崎御嶽に移動する。そして、奉納芸能の後、夜、「ツナノミン（綱の耳寄せ）」という担がれた台に一人ずつ乗った形での棒技、綱曳きが行なわれる。なお、美崎御嶽は、ヤマニンジュを持たない御嶽であるため、別途、神役たちの祈願と供物が行なわれる。石垣の宮鳥御嶽でも、祈願と奉納はほぼ同様であるが、午前中、ミシャグパーシが行なわれ、「ヤーラーヨー」、「フナブス」他がうたわれ、午後、奉納芸能となる。新川では、午後、長崎御嶽での祈願と奉納芸能が行なわれ、真乙姥御嶽では2日目の諸準備が行なわれる。初日は、御嶽を中心に各字ごとの祭祀であり、同時並行で行なわれる。基本的流れは、祈願と供物、神酒の献上と神謡、そして旗頭、太鼓、巻き踊りの奉納、表彰、棒技、獅子舞他の奉納芸能である。以前、1日目が、ブバナアギと呼ばれていたように、最も重要なのは、ツカサによる稲の初穂他新穀の奉納、そして男性た

ちによる米を使った神酒の献上と神謡である。そこに青・壮年男性の旗頭の巡行、少年の太鼓、女性による巻き踊り、その他、棒技や獅子舞の奉納芸能、宇会と会長を中心とした農業に関する表彰が付随したものである。

2日目は、新川の真乙姥御嶽が舞台となる。午前中、ツカサによる祈願と供物、ミシャグパーシが行なわれる。午後、四箇他の字や学校等から旗頭が集まる。そして、新川を先頭に各字ごとに、旗頭、太鼓、巻き踊り他の奉納芸能となる。夕刻、神の役とツカサ役の人の「五穀の種子受けの儀」、女性の代表がツカサから綱曳きの貫棒を受け取る「アヒャー綱」と「ガーリ」、日が暮れて、鎌と長刀の対決となるツナノミン、大綱曳きが行なわれる。この日は、以前、「ユニーゲイ（世願い）」と呼ばれていた。参加地域が広く人が多いが、祭祀の流れは前日と大きくは変わらない。各字では、青年たちを中心に旗頭の豪華さと勇壮さを競い合う。ハイライトは、女性たちによるアヒャー綱、その後のツナノミン、東西分かれて全員参加の大綱曳きである。

豊年祭は、稲の初穂を御嶽の神に捧げ感謝を願い、神酒を作り祝う、そして芸能を奉納し、翌年の豊作を祈願するというものである。士族層の介入、蔵元と納税の政治的な関わりが推測できるが、本来は、各字ごとにツカサとその御嶽に帰属するヤマニンジュが行なっていたものである。

豊年祭から以下の点が指摘出来る。①祭祀は、女性司祭者であるツカサの祈願と稲の初穂の奉納、神酒の献上と神謡、奉納芸能であり、新たな要素の加入もあるが基本的な構造の変化は少ない。②近世からの人口集中と増加、各字の独立意識を背景とした地域的対抗意識がみられる。③琉球王府の直接統治という歴史的経緯によって生じた士族対農民の階層による対抗意識がみられる。④2日目の

新川への各字の集合、多くの人々に見せることを前提とした旗頭の大形化とその移動領域・参加団体の拡大、芸能の発達、ツナノミンや綱曳きの導入によるスペクタクル化が認められる。

(4) 司祭者と宗教的世界の動態

八重山諸島の祭祀組織の基本は、歴史的にみるとオヤケ・アカハチの乱以降、琉球王府から任命された「ホールザー」もしくは「ウフアム（大阿母）」と呼ばれる高位の女性司祭者が中心となり、各地域、各離島の御嶽のツカサを統括してきた。『八重山島由来記』、『八重山島大阿母由来記』によると、初代ホールザーはこの戦いの平定に協力した長田大主の妹で功のあった真乙姥が任命されたが、その職を平得の多田屋遠那里に譲り、自らはその下の「イラビンガニ（永良比金）」になった。以降、代々旧士族層の特定の氏の系譜に関係する家からホールザーが出ている。なお、現ホールザーは、1983年に神からの啓示があつて就任したが、現在、関東居住で健康上のこともあり、祭祀にはほとんど参加していない。

登野城の天川御嶽はツカサ不在のため同地の稲為御嶽のツカサによる祭祀の代行、大川の大石垣御嶽は同地出身で白保居住のツカサによる祭祀、石垣の宮島御嶽は沖縄本島居住のツカサによる祭祀、新川の真乙姥御嶽は同地出身のツカサによる祭祀、長崎御嶽はツカサ不在のため代行による祭祀となっている。美崎御嶽は、本来、ホールザーの担当であるが、近年就任したイラビンガニと「キライ」という神役他の祭祀となっている。

ツカサの役割は各担当の御嶽での祭祀とその地域のヤマニンジュの個々の祈願の充足である。ツカサは個人的に、ヤマニンジュの生まれ年の祈願、屋敷の祈願、運氣強化の

祈願を行なうこと等が求められる。ツカサの存在は、人々からユタとは区別されているが、近年、個人的な祈願や宗教的アドバイスを受ける例が増加している。旧士族層の家の父系からの継承を理想としながらも、双系的、母から娘等のゆるやかな継承に特徴を持つ。

現在のツカサの在り方から以下の点が指摘出来る。①各字の御嶽の祭祀はその地区（もしくは同地区出身）のツカサが担当し、美崎御嶽のみがホールザー他の地域を超えた神役の祭祀となっている。②ツカサの継承は双系的かつ柔軟であり、その就任過程においては巫病や神からの啓示等の神秘的体験をしている。③ツカサ不在の御嶽もあるが、近年、新たに生まれたツカサもあり、祭祀の縮小とはいえない。そこには現ホールザー他の関与がみられる。④ツカサが従来の職能以上にユタ的な個人的祭祀の充足を行なっている例がみられる。⑤ホールザーを中心とした祭祀体系が必ずしも維持されておらず、認知上の意識の差異、シャーマニスティックな要素、宗教的世界観の相違からツカサ同士のコンフリクトがみられる。

(5) まとめ

祭祀については、本来の祈願の部分の変化は少ないが拡大がみられる。旗頭の大形化や移動の変化、芸能の変化は近世期から起きていることである。祭祀の拡大の要因は、四箇が近世期からの政治・経済の中心にあったこと、人口の集中にあると思われる。

また、ツカサの在り方には、祭祀の遂行と継続、旧士族層の家々の歴史的記憶と継承、宗教的知識の共有と合わせて、シャーマニスティックなオリジナルな世界観による動態と差異が認められる。

しかしながら、石垣市を含めた八重山諸島の宗教的世界全体を見渡すと変容や動態が

認められるが、その実践及び説明はシステムティックに行なわれ、大きな変化やコンフリクトの抑制が行なわれている。現代的要因による極端な簡略化、シャーマニスティックな世界観の過度な展開による改変が少ないのである。そこにあるのは、むしろ現代的な生活にあわせた整合化、神と同一化しない適度な距離感とシャーマニスティックな領域から生じる浮遊領域の活用である。これらによって祭祀の維持更新、ツカサの継承がされやすくなっているのである。このようなこと背景には、琉球王府の宗教管理、明和の天津波以降の計画的町づくり、旧士族層の統治とその後も残る階層性、明確な地域区分と帰属意識といった、近世期からの王府から距離があるが直属の地方都市的な要素があると思われる。

人々は旧来の宗教的意識を基に祭祀を継承してきているだけでなく、政治的な統治システム、歴史的に形成された階層性や地域区分を背景に祭祀を行ない、また祭祀を行うことでそれらを確認してきたといえる。

沖縄諸島、宮古諸島と比べ、八重山諸島の祭祀の特徴は、歴史的・政治的な影響、可視的かつシステムティックな遂行、最小限のシャーマニスティックな要素による宗教的世界の動態と自己管理、芸能の発達といえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 真也 (MORITA SHINYA)

筑紫女学園大学・文学部・准教授

研究者番号:10412686

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し